

大学の動きを知る

—KyotoU News—

京都大学では、学生支援・社会連携・産官学連携・国際連携等、各種取組を推進しています。京都大学Webサイトの「KyotoU News」

では、これらのトピックスを紹介しています。

※ 所属・職名については、行事開催時点もしくは発表時点のものです。

www.kyoto-u.ac.jp/ja/news



国際卓越研究大学の認定候補に選定されました

2025年12月19日付で、本学は国際卓越研究大学の認定候補となることが適当であるとの審査結果が文部科学省より公表されました。これを受け、本学では記者説明会を開催しました。同説明会において、湊長博総長から「国際卓越研究大学の認定等に関する有識者会議（アドバイザリーボード）の意見を踏まえ、「京大ビジョン」の策定と「デパートメント制」への移行を加速させることにより、国際卓越研究大学としてできるだけ速やかな認定を目指していきたい」との決意が述べられました。本学は、自由な研究環境のもとで、社会を変革する価値とグローバルに活躍する高度人材を生み出し続け、世界から多様な研究人材が集う国際的な知の拠点となるよう、全学を挙げて社会のみなさまの期待に応えてまいります。



左から、江上雅彦 理事・CFO・副学長、岩井一宏 理事・プロボスト・副学長、湊 総長、北川 進 理事・副学長、國府寛司 理事・副学長

柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授がアーベル賞授賞式に出席しました

ノルウェー・オスロ大学のセレモニアルホール（アウラ講堂）において、2025年5月20日にアーベル賞授賞式が行われ、柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授が2025年アーベル賞を受賞しました。授賞式では、ハーラル5世国王陛下から柏原特任教授に表彰楯が手渡されました。また、授賞式後には、アーケシュフース城においてノルウェー政府公式晩餐会が開催されました。



アーベル賞授賞式の様子（©Thomas Brun (NTB) for the Abel Prize）

北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授がノーベル化学賞を受賞しました

北川 進理事・副学長、高等研究院特別教授の2025年ノーベル化学賞受賞が決定しました。本学は、受賞の発表を受けて、10月8日に湊 長博 総長、野崎治子 広報担当理事の同席のもと、北川 進 理事・副学長、特別教授の受賞記者会見を行いました。会見では、最初に湊総長がお祝いの言葉を述べるとともに、北川理事・副学長、特別教授が受賞の感想を述べました。会見終了後には、各報道機関からの個別取材を受けました。翌10月9日には、百周年時計台記念館にて花束の贈呈が行われました。関係者から祝福される中、高等研究院の職員より北川理事・副学長に花束が手渡されました。その後、記者会見を行い、一晩たつての想いや、これから研究者を目指す高校生、大学生および若手研究者へのメッセージを述べました。



花束を受け取る北川理事・副学長、特別教授

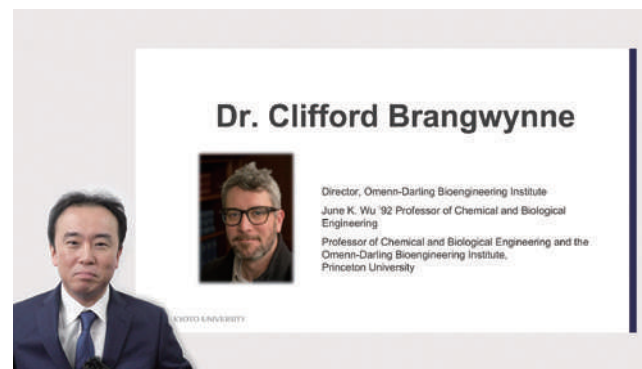
北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授と坂口志文 名誉教授がノーベル賞授賞式に出席しました

スウェーデンのストックホルム・コンサートホールにおいて、2025年12月10日にノーベル賞授賞式が行われ、北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授がノーベル化学賞を、坂口志文 名誉教授（大阪大学特別荣誉教授）がノーベル医学・生理学賞を受賞しました。授賞式では、カール16世グスタフ国王から北川理事・副学長、特別教授と坂口名誉教授にそれぞれメダルと賞状が手渡されました。また、授賞式後には、ストックホルム市庁舎において晩餐会が開催されました。



授賞式に臨む北川 進 理事・副学長、特別教授と坂口志文 名誉教授（大阪大学特別荣誉教授）

京都大学レクチャーシップアワードを創設し、第1回受賞者が決定しました



受賞者を発表する斎藤通紀 高等研究院教授（選考委員長）（受賞者発表動画より）

本学では、2025年度より、「京都大学レクチャーシップアワード」を新たに創設しました。本アワードはノーベル賞受賞者を多数輩出してきた本学の伝統を背景に、将来の科学を切り拓く卓越した研究者を顕彰し、国際的な研究ネットワークの形成と健全な学術の発展を推進することを目的としています。本アワードの特色は、本学の研究者が厳正に選出した優れた研究者を京都に招へいし、特別レクチャーおよび交流を通じて触発の機会を提供する点にあります。受賞者と若手研究者が出会い、学問の最前線で培われた知と視座を共有することで、新たなインスピレーションの連鎖を生み、「未来を拓く研究の萌芽」を育むことを期待しています。創設第1回となる2025年度は、医学・生命科学分野における選考が行われ、プリンストン大学教授であるClifford P. Brangwynne（クリフォード・ブラングウィン）博士を受賞者として選出しました。

「ウクライナ留学生との懇談」を開催しました

2025年7月7日、ウクライナ留学生との懇談を清風荘にて開催し、留学生5名のほか寄付者らが参加しました。本学では、ウクライナ情勢に関し、本学の学術交流協定校を含むウクライナの大学・学術機関の関係者に対して支援を行うため、2022年に「ウクライナ危機支援基金」を設立し、危機的状況に置かれた学生を本学において受け入れ、教育や研究活動を支援してきました。当該学生の検定料・入学科・授業料は、本学の負担による免除とし、生活費などの支援を目的とした奨学金についても本基金を活用し、学習・研究を継続できるよう支援しています。これまでに55名の留学生を受け入れています。今回、本基金に多大なるご支援をいただいている寄付者代表として建築家の安藤忠雄氏をお招きして、ウクライナの留学生5名、湊 長博 総長、稲垣恭子 理事・副学長との懇談の場を設けました。学びの場は平和で開かれたものでなければならないという信念のもと、本学は国際連帯の精神を持ち続け、知の橋をかけていきたいと考えています。



集合写真

KU-STAR Program for India 2025 および for Australia 2026 を実施しました

大学院教育支援機構では、海外の優秀な学生に本学の研究環境を体験してもらうことで、将来的な大学院留学生の増加を目指す「Kyoto University Short-Term Academic Research (KU-STAR) Program」を実施しています。その一環として、2025年5月20日から7月17日にかけてインドからの大学生を、2026年1月8日から2月20日にかけてオーストラリアの大学生を対象に本プログラムを開催しました。

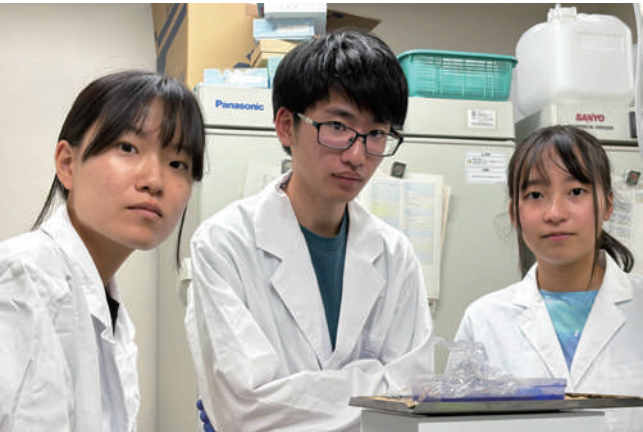
インドからは31名の優秀な学生(学部生、修士課程修了生)を、オーストラリアからは10名の優秀な学生(学部生、修士課程学生)を受け入れました。参加学生が京都大学へ進学・卒業した際、日本でのキャリアパスの可能性について理解を深められるよう、株式会社島津製作所などの企業や本学iPS細胞研究所を訪問したほか、京都の文化や伝統に触れる機会を提供しました。プログラムの最後には成果発表会を実施しました。

短期間ではありましたが、参加した学生たちは各自の研究室で研究に真摯に取り組み、大きく成長を遂げたことを実感しました。また、彼らが将来、大学院生や研究者として本学に戻ってきてくれることを期待しています。



島津製作所サイエンスプラザへの訪問

学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会「iGEM 2025」で金賞を受賞しました



実験室での様子

本学の学部生による研究チーム「iGEM Kyoto」が、2025年10月28日から31日までフランス・パリで開かれたiGEM 2025 Grand Jamboreeに出場し、金賞を受賞しました。これにより、チームとしては2023年から3年連続、また出場しなかった年を除くと2019年・2021年を含めた5大会連続の金賞となります。iGEM (International Genetically Engineered Machine Competition) は、2003年に米国で始まった世界最大規模の合成生物学の学生研究コンテストです。2025年はパリのポルトベルサイユ国際展示場を会場に、世界50以上の国・地域から400を超えるチームが参加し、5,000名を超える参加者が研究成果を競いました。プロジェクト「Avisptosis」に取り組み、高病原性鳥インフルエンザの蔓延を合成生物学で阻止する研究を行いました。遺伝子組換え実験に加え、数値モデリング、社会実装、市場調査など、幅広い活動が高く評価されました。

「京都大学ポスターセッション2025」を実施しました

高大接続・入試センター主催による「京都大学ポスターセッション」を、2026年3月14日に、百周年時計台記念館国際交流ホールにて実施しました。本企画は、ポスター発表を通じて高校生が日頃の課題探究活動の成果を披露するもので、2017(平成29)年度から通算9回目の開催となります。今回は、全国の国公立高校30校から148名が参集し、文系理系あわせて30テーマのポスターが出展されました。発表生徒たちは綿密な打ち合わせを行い、プレゼンテーションの最終確認や質疑応答のリハーサルを重ねました。本番を目前に控え、会場は適度な緊張感に包まれていました。発表本番では、自作器具を用いたプレゼンテーションの補足や、理解を深めるためのレジュメ配布など、多彩な工夫が見られました。生徒たちは研究成果を堂々と発表したほか、他校の発表に対しても真摯な姿勢で質疑応答や評価を行っており、「未来の科学者」としての高い意識がうかがえました。プレゼンテーション終了後、参加者全員による投票結果と複数の高校教員による審査意見に基づき、3校を優秀ポスター賞に選出しました。閉会式では、村上 章 高大接続・入試センター長による全体講評が行われ、研究力を醸成するための助言が送られるとともに、課題探求活動に携わる高校教員の方々へ謝意が述べられました。



優秀ポスター賞受賞校の代表生徒

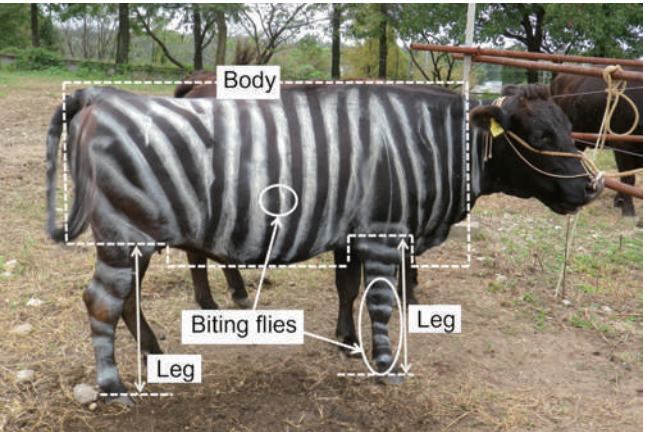
株式会社リガクおよび日本電子株式会社と協定を締結し、「リガク/日本電子-iCeMS イノベーションコア」を設置しました

本学と、リガク・ホールディングスのグループ会社である株式会社リガク、および日本電子株式会社は、三者がお互いの強みを活かし、共同して研究開発、人材育成を行うため、2025年9月4日に協定を締結し、新たなオープンイノベーションの組織を設置することになりました。新たに設置される「リガク/日本電子-iCeMS イノベーションコア (RIGAKU/ JEOL-iCeMS Innovation Core)」は、高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS=アイセムス) の解析センター内に設けられる共同研究組織です。このコアでは、極微小結晶の電子線回折を中心とした革新的な分子構造解析法を活用します。これにより、基礎的な研究の推進、研究成果の社会還元、人材育成を目指し、産学連携による新しいイノベーションの創出に貢献します。オープンイノベーションによる物質科学の発展のための研究開発拠点として、アカデミアと産業界の連携によって発見された微結晶性材料を対象に、その構造と機能の関係性を解明し、新たな応用展開に向けた基盤を築くことを目指します。



左から、古川修平 iCeMS 副拠点長、上杉志成 iCeMS 拠点長、大井 泉 日本電子株式会社代表取締役社長兼CEO、川上 潤 株式会社リガク代表取締役社長CEO、湊 長博 総長、北川 進 理事・副学長、森 重文 高等研究院長

農学研究科等の共同研究グループが、2025年イグ・ノーベル賞(生物学賞)を受賞しました



白のスプレーでシマウマ模様に塗ったウン(クレジット:PLOS ONE, Kojima et al. 2019)

児嶋朋貴 農業・食品産業技術総合研究機構研究員(農学研究科・2010年修了、研究当時:愛知県農業総合試験場主任)、大石風人 農学研究科准教授、廣岡博之 名誉教授らによる共同研究グループが、ウンにシマウマ柄のシマ模様を人為的に施すことで、吸血昆虫忌避効果があることを実証したことにより、2025年イグ・ノーベル賞(生物学賞)を受賞しました。

卒業生の畠山丑雄さんが、第174回 芥川賞を受賞しました

2026年1月17日に芥川龍之介賞の選考委員会が開かれ、本学卒業生の畠山丑雄さんの『叫び』が受賞作に選ばれました。畠山さんは、2015(平成27年)、本学文学部在学中に『地の底の記憶』で第52回文藝賞を受賞しデビューしました。地方公務員として働きながら小説の執筆を続け、2025年(令和7年)には『改元』で第38回三島由紀夫賞候補となりました。畠山さんの今後のさらなる活躍が期待されます。



畠山丑雄さん